



草津温泉 温泉門ものがたり

～この場所から^{とき}時代を紡ぐ～

群馬県 草津町

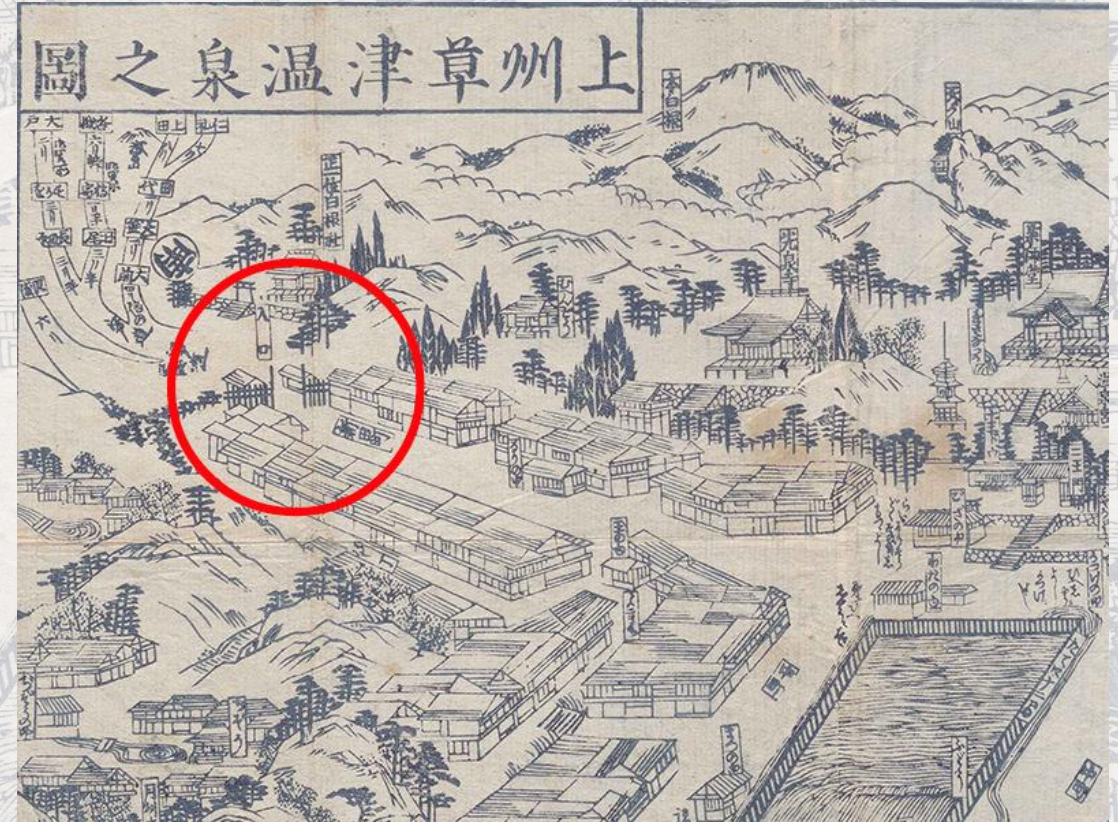
温泉街の「入口としての顔」と 「交通の要としての役割」の両立へ

車での移動が中心となった現在、年間400万人を超えるお客様が草津温泉を訪れています。それに伴い、週末・繁忙期等において温泉街での慢性的な渋滞が問題となっていました。その要因として温泉門が完成するまでは温泉街方面からの**直進車両側に一時停止**があり、東京方面から来た車両の**右折優先**という特殊な状況がつづき分かり辛く危険な交差点となっていました。この状況を改善すべく構想から9年、道路の立体交差化を実現。併せてコンクリートの無機質な景観は観光地草津の入口にそぐわないとして修景事業も行い、新たな観光スポットとして「湯」と「湯樋」と「湯けむり」をモチーフとした**湯畑のサテライト「温泉門」**が完成しました。また“歩いて楽しい”街づくりの一環として温泉門から湯畑へと続く通り（現在の中央通り）の賑わいを復活させるための整備も進めています。



旅人たちを見守ってきたこの場所に。

江戸時代後期 文化文政の時代、草津温泉は「草津千軒江戸構え」と称されるほどの賑わいを見せていました。当時の様子を伝える古絵図には多くの湯治客が通ったであろう街道から温泉街への入口（現在の中央通り）に木戸や番屋が描かれており、まさに完成した「温泉門」の場所と重なります。



また温泉門近くの道の駅には「泣き燈籠」があります。草津湯治は長逗留のため、湯客の間や宿の女中、湯治生活を共にした残る客が見送って別れを惜しんだところから、誰いうことなく泣き燈籠と呼ぶようになったと言われています。

草津温泉
其湯御座湯号
將軍頼朝公騎御
養老五曆行基
當温泉入皇
宇養老五曆行基
當温泉入皇

～惜しまれつつ廃線となった～

【草軽電気鉄道】

草軽電鉄の創業は、スイスの登山鉄道のように高原の避暑地へ、また、草津温泉へと旅客を導くというアイデアに端を発し、大正4年（1915）7月に新軽井沢－小瀬温泉間が開通。大正13年に蒸気機関車から電気機関車へと切り換えられ、大正15年（1926）9月、新軽井沢から草津温泉までの全長55.5 kmが全線開通となりました。終戦直後の昭和21年3月、草軽電鉄はピークの46万人という乗客を記録しました。しかし翌月、国鉄長野原線（現JR吾妻線）が上越線渋川～長野原間の旅客営業を始めます。乗客は減り始め、あいつぐ台風の被害も追い討ちをかけ、昭和37年（1962）1月31日を最後に惜しまれつつも廃線となりました。（出典：草軽鉄道Web博物館 www.kkkg.co.jp/museum/history.html）



草津温泉駅「出征兵士」の見送り

現在は温泉門近く草津温泉ホテルリゾート駐車場そばに「草津温泉駅跡」の碑が残るのみです。

“温泉門”

それは草津温泉へのみちしるべ

令和5年10月25日に竣工した温泉門、江戸時代の古絵図にはこの場所に木戸や番屋があり当時の旅人たちの往来を見守ってきました。また、大正時代には軽井沢と草津温泉を結ぶ草軽電気鉄道が開業し温泉門近くにあった駅舎から温泉街へと続くメイン通りとして賑わっていました。悠久の年を経て令和の時代になった今、足湯につかりながら同時に思いをはせてみる。新たな草津温泉の楽しみ方としておすすめします。



【草津町民憲章】

“歩み入る者にやすらぎを、

去り行く人にしあわせを”

(町民憲章制定 1979年)

「温泉門」は草津温泉の新しい^{とき}時代を紡ぎます。